パソコン留年生の地方史料整理

中村 誠司：名桜大学国際学部

今回のプロジェクトのために、私たちの研究班３名はパソコンを買った。調査した地方史料整理情報を「桐」で入力するためである。詳しい友人から手ほどきを受け、慣れない作業を始めた。ここ２年、ひたすら「桐」と付き合ってきたが、「桐」を出ることなく、留年中である。

ただ、活動の場である沖縄本島北部（山原）に関する資料について、「桐」でできる情報の整理・作成はいくつも手をつけてみた。戦前戦後の新聞記事目録や各市町村の広報紙の記事目録、山原地域に関する研究論文目録、ある村の戦前の生活道具発掘資料目録などなど。これらは、２～３年うちに市民利用ができるよう公開する予定だ。

本土や沖縄の研究報告会にはできるだけ参加し、情報科学の方々、歴史学の情報処理に通じた方々の話に耳を傾けたが、理解できていない。パソコン留年生は、今はしんどい課題だが、きっと楽しい仕事になるだろうと、ささやかな希望をもって年を越した。

沖縄県内各地、とくに石垣市、久米島、沖縄本島北部の名護市・国頭村・本部町・今帰仁村等の地方史料の調査と整理に関わることができたのはありがたかった。これほど大量かつ興味深い地方史料と付き合えるのは、めったにないことである。沖縄の地方史料の多様性、いいかえれば沖縄の地域史像の豊かさをあらためて再発見したような気持ちだ。

各地を巡り、史料の紙ホコリにまみれる作業の日々、夜は島酒で地元の方々とゆんたくできる楽しみ、そしてもどってはパソコンに向きあう毎日、それこそ過去と現在を行き来する貴重な経験をすることができた。この調査研究はずっと未完であり、これから多くの関係者とともに情報を豊かにしていく作業がある。また、公開利用され、いろんな人たちに使い慣らされていくなかで、より使いやすいデータベース状態にしていくことも課題である。

２年間の「桐」修業と経験の時間を終え、そろそろ留年を解いてもらって、次ぎの新たな領域の門をたたいてみたいと思っている。